



# 高天神城の戦いについて



C作・E作 用瓦文庫  
 天正十一年(一五七三)の豊後攻め、三  
 河城に於ては、高天神城の存在が認められ  
 一層、形勢は悪化を遂げ、ついに、城外  
 まで入城を許すに至るに至り、城外  
 へ入城した。豊後軍は、高天神城を  
 陥れ、高天神城を占領した。

## TALES OF TAKATENJIN CASTLE

「プロローグ」

豊者とした静寂な社の中、「兵どもが夢の跡」  
 を彷彿させる高天神城。戦国時代、武田氏と  
 徳川氏による激しい争奪戦が繰り返されました。  
 「高天神城を制する者は遠江を制す」と謳われま  
 したが、高天神城は東海道から分岐する塩の道  
 (信州街道)の終末に位置し、城からさらに西へ  
 は沿岸の道しかありません。また、城の南の遠  
 州灘にはかつて浜野浦と呼ばれる湾がありまし  
 たが、高天神城からはそれなりの距離があり  
 ました。

はたして、高天神城は争奪にあたいする程の  
 城郭だったのでしょうか。なぜ、激しい争奪戦が  
 繰り返されたのでしょうか。争奪戦の原因と背  
 景、ならびに戦いの経過をみてみましょう。

### 高天神城の歩き方 ①

A	B
C	
D	

【A. 勝手門付近】城の入口である大手門(勝手門)に到った裏の裏山を勝手山と呼び、戦国時代にはここに門が配置されていた。【B. 勝手からの登城路】登城路が現在に比べ戦国時代は狭かったが、急峻であることは変わりない。【C. 勝手からの登城路】登城路は急峻であることにくわえ、各所をつら狭に折れ曲がることによって行く手の視界が遮られる。【D. 勝手からの急登】登城途中、頭上目を見れば、豊原とした事に切り立った急崖が現れる。この急崖を目にした攻め手は、戦意を喪失したところだろう。



天正 1574年

高天神城を巡る攻防 chapter 1

# 天正2年(1574) 武田勝頼による 高天神城攻め

## 二 天正二年以前の 武田信玄による高天神城攻めとは

永禄三年(一五六〇)桶狭間の戦いで今川義元が織田信長に討たれると、遠江における今川勢力はしだいに衰退、それまで今川方にあった御衆も川氏からの離反が相次ぎました。それを好機とみた武田・徳川両氏は、今川軍への侵攻を開始することになります。まずは両氏の遠江制覇の上での重要な駒として浮上したのが高天神城でした。今川方の時の城主

を自認していました。武田氏の兵站<sup>へいせき</sup>拠点である陽助原城に加え、海岸沿いの小山城(吉田町)と海城城(相良城)・牧之原市を整備し兵站ルートを補強することで、武田氏によって決戦に有利な高天神城を攻撃目標としました。一方の徳川氏にとって遠江における領土は浜松城と中東遠(掛川市・袋井市)を除けば、ほぼ武田勢に占領されていたことから、これ以上武田氏による占領は許さず、何としても高天神城を死守しなければなりません。後に、武田氏により高天神城が攻撃されれば、後話<sup>あとわたり</sup>として脱戦しなければならぬ状況になりました。

武田・徳川の両氏にとって、遠江の覇権をめぐっては、どうしても手に入れなければならない重要な駒、それが高天神城であり、武田・徳川氏の決戦の舞台となったのです。

天正二年(一五七四)五月三日、武田軍は二万五千(二万とも)の大軍を率いて甲府を發つと、瞬く間に高天神城は武田の大軍に包囲されてしまします。守る小笠原氏率いる徳川軍は自軍のみでの防戦は困難と判断、同盟関係にあった織田信長に出馬を要請。織田・徳川の連合による後話を圖算<sup>えんざん</sup>しました。

武田軍は城の包囲とともに海攻をくり返し、5月下旬には本丸・二の丸・三の丸をはじめ

小笠原氏興<sup>おがさわら</sup>、氏助(後に信興に改名)父子が徳川方に付き、高天神城はまずは徳川方の城となりました。

今川氏の滅亡後、武田信玄は駿河をめぐり北条氏との抗争に明け暮れていました。抗争の舞台となっていた深沢山城(御殿場市)を攻略し、東の防衛を固めると、侵攻の先手を遠江に向けました。信玄自ら二万の大軍を率いて遠江に入り、増賀城(御前崎市)に布陣、高天神城の城主小笠原氏助を降伏に追い込んだとされます。その後、徳川方へ復帰します。この信玄による高天神城攻めについて、近年の研究では元龜二年(一五七二)の三河・遠江侵攻の存在を否定する見解が多く、また、翌三年の遠江侵攻の様相についても議論が続いています。

## 二 武田勝頼の逆襲

上杉謙信が目黒、北条氏康・織田信長・徳川家康の名だたる戦国大名が恐れ、猛將武田信玄が元龜四年(一五七三)に急逝しました。信玄なき後の勝頼にとって、信玄がし得なかつた徳川領の遠江・三河の占領こそが吊いを含めた難役であり、その緒戦は高天神城の奪取でした。

勝頼は、遠江の完全制覇に加え徳川氏の殲滅

## 高天神城の歩き方 ②

【A. 勝手から曲輪群へ】勝手からの急な登城路を切り切る小さな平場にとどまり、この辺りに真なる曲輪群(御衆)をもちた東軍と西軍に分かれる。【B. 本丸】高天神城の曲輪の中で最も高所であり、最も広い曲輪。北側は急崖、南側には土塁をめぐらし、さらに的場曲輪・腰曲輪により固守されている。【C. 本丸南側の登城路】本丸から三の丸へ向かう登城路は階段状に整備されているが、南側に目をやると急崖が展開していることがわかる。【D. 井戸曲輪の井戸】階段状においては、水の確保は絶対不可欠であった。高天神城と称ばれる古大井川が運んだ大小の礫を多量に含む非常に硬質な岩盤に掘られていた。掘削には数層したであろうことが予想される。



## 武田信玄の遠江侵攻図

武田氏の侵攻は、信玄率いる本隊と、山県昌景・秋山虎賢らが率いる別働隊に分かれる。信玄本隊は、東海道を進み駿河から遠江へ入り、海岸沿いに運ぶ高天神城の小笠原氏助を脅かす。見付方面へ向かった。山県・秋山別働隊は、青原時頼とくは兵越時を越え遠江に入った。

※兵站：軍車の上の人員・兵器・糧秣などの整備・補給等の物流全般を指す。  
※後話：城を包囲した戦や籠城した戦の後方から攻撃すること。

※図案：戦国時代に登場した地方名で、戦国大名に属し戦国大名は大きくはなげ、小規模ながらも独自に領域支配を行っていた。

高天神コラム

伝説を裏付けた大河内石窟



大河内正崎が築られたとされる石窟は、本丸下の北山腹にあり、その規模は奥行約2m、横幅約3mを測る狭い空間でした。西日が差し込み、冬季にはからっ風と呼ばれる強い寒風が存続なく吹き込み、厳格な環境でした。また、高天神籠城と呼ばれる非常に硬質の岩盤に構築されていました。大小多数の礎が露出する天井と壁面から成る横穴は、まさに石窟もしくは石牢と呼ぶにふさわしく、その呼称が流布したものと考えられます。

平成22年(2010)の台風により石窟の上部が崩落、埋没。ただし緊急調査が実施され、調査の結果、下層から堅穴と横穴(石窟)が発見されました。石窟の真偽については後述の節で、伝説との見解もありますが、この発見により事実であることが判明しました。

政局は三河時代からの家康の家臣であり、家康の外祖母が政局の祖母にあたる家康の外戚関係にありました。また、家康の幼少期には近習として仕えており、政れたといえ家康直系の家臣としての誇りから開城を望まず、籠城ではなく自ら石窟に籠城したとも言えます。

とする諸説<sup>※</sup>に迫り、六月には壁の尾曲輪・西の丸が落とされてしまいます。高天神城の地形的特徴として北から東にかけては急崖を成しているのに対し、壁の尾曲輪・西の丸が位置する赤松谷と呼ばれる西側は傾斜が緩やかであり、そこからここへ攻め込まれました。

勝頼は攻と合わせ籠城にも動き、六月十七日、小笠原氏助は武田氏からの一万貫の所領という好条件の提示で城兵の助命を引き換えに開城。高天神城は武田氏の城となりました。

三三 織田信長の援軍、間に合わず

一方、援軍要請を請けていた信長は、越前・伊勢の一向一揆との戦いに忙殺されていました。高天神城を救うべく六月十四日に岐阜城を発ちました。進軍途中の吉田城、愛知県豊橋市にて落城の報を聞くこととなり、期待された信長の援軍は間に合いませんでした。

開城において城兵は、武田方に付くか徳川方に残るか各人に任せられましたが、唯一一人、開城に応じなかった軍監大河内正崎、政局・正房・源三郎は勝頼の怒りを買ひ、高天神城の石窟に幽閉されてしまいました。開放されたのは、七年後の天正九年(一五八二)三月、徳川方による高天神城奪還の時でした。



武田勝頼の遠江侵攻図

武田勝頼は駿河から丸子城・田中城を経由し、諏訪原城に至る東海道の援軍ルートにむえ、江尻城から総勢に小山城・海城・相良城へと物資を運ぶルートを開拓した。諏訪原城は武田方の兵站拠点としつつ、徳勝とサブ城館跡を相良海城・相良城を背後にもつ高天神城こそ武田方に有利な決戦地であることがわかる。

※曲輪：城の内を外土塁・石垣・堀等で区画した区域。

※調略：内通者(スパイ)を使って敵の中心人物を掌握せたり、降伏させたり、謀反をおこせたりするように仕向けると。

体感する高天神城

搦手門から石段を登る  
攻め手を阻む絶壁の山  
この城を攻めるのは難しいと  
身体で感じる旅



九 天正 1581 年

高天神城を巡る攻防 | chapter 2

# 天正9年(1581) 徳川家康による 高天神城攻め

とくがわいえやす

## 〔二〕 武田氏、攻勢から守勢へ

天正二年(一五七四)の高天神城奪取に上りついでに、武田氏に左手を掛けたと思われた武田勝頼でしたが、翌三年の西條の戦いでは織田・徳川連合軍に敗北を喫し、その敗北を境に攻勢から守勢に転じるようになります。武田氏の弱体化とみるや、家康はそれまで武田方に占領されていた城郭の奪還に動き始めます。一俣城・浜松市をはじめとする北遠・中遠の武

田方の城郭が次々と攻め落とされ、ついには武田方の兵站拠点であった諏訪原城・島田市までもが落とされてしまいます。諏訪原城を失ったことにより、高天神城は徳川領に対峙する前線基地といふより、孤立した突出点となつてしまっていました。

## 〔二〕 高天神城の弱点克服、武田勝頼による大改修

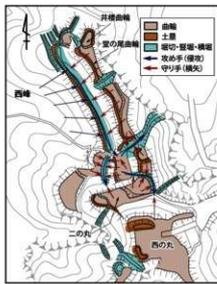
勝頼は高天神城の大改修を行っています。天正二年(一五七四)の勝頼による改修跡では、堂の尾曲輪・西の丸・一の丸を擁す西峰から攻め込んでいきます。西峰は、急崖が特徴とされる高天神城にあつても傾斜が緩やかであるため、武田方も高天神城のアキレス腱とも呼ばれる弱点と認識しており、ここを中心に技巧的な大改修を行いました。

堂の尾曲輪から井楼曲輪にかけての100mにも及ぶ横堀と土塁は山麓においては非常に長大で、さらに各曲輪を分断する堀切が連続してみられることも特徴です。攻め手にとって通路は狭い横堀のみならず、いざ尾畑に入れば上の曲輪からの容赦ない頭上攻撃に晒されることになります。

さらに二の丸周辺の袖曲輪・馬出曲輪など



堂の尾曲輪下の横堀に誘導された攻め手は、比高差12m程の堂の尾曲輪上から銃砲・弓矢・石などによる横矢に晒される。狭い横堀内でそれらをかきよむことはほぼ不可能であろう。



●西峰：曲輪を取り囲むように掘られた堀。  
●土塁：敵の侵入を防ぐために、主に土盛によって築かれた掘削された防衛施設。  
●堀切：尾塚ついに攻めこめる敵の進路を阻止できるように、横堀を断ち切るため。

の小曲輪が段差をもつて重層的に連なり、明瞭な虎口(城の出入口)をもたない行き止まり構造となつていきます。隘路としての横堀から袋小路として的小曲輪に追い込み、行き場を失った侵入者に対し執拗な横矢を浴びせ、まさにキルゾーンとも呼べる徹底した迎撃構造が構築されていたのです。孤立した城郭になつたとは言え、単体としての城郭の戦術的ポテンシャルは一層高くなつていたのです。

勝頼はこの大改修にくわえ、徳川から獲返つた小笠原信興を駿河に移し、武田方の岡部元信を城将としており、武田氏の直接支配とされていることから、戦術的に重視していたことがわかります。



## 【横堀】 堂の尾曲輪下の横堀・土塁

堂の尾曲輪の斜面は木々に覆われているが、斜面裾には堀が残っていることがわかる。この長い堀が横堀である。



## 【横堀】 堂の尾曲輪から横堀を見下ろす

堂の尾曲輪からは横堀が見渡せる。西峰から攻め込んだ攻め手は、否応なしにこの横堀に落ちるように懸断が懸断される。



## 露頭した高天神城層

高天神城の崖山は、主に高天神層と呼ばれる古大井川が運んだ大小の礫を多量に含む河成堆積物の崖壁から成る。本天守の城壁などは、礫層の間に掘削した法面と城趾の崖壁が覆われている。

## TAKATENJIN COLUMN

2

高天神コラム

## 天目茶碗と茶入



非横堀・堂の尾曲輪等から成る西峰の曲輪群は、キルゾーンもしくは戦術エリアとしての特徴を持っている。発掘調査では、曲輪の特徴を裏付ける興味深い発見がありました。

堂の尾曲輪の小穴から、天目茶碗と茶入が出ました。茶入に天目茶碗を伏せた状態で、その出土状態からは明らかに人為的に埋められたものと判断されます。どのような理由でここに埋められたのでしょうか。想像をたくましくすれば、武田方の兵士が普段使っていた天目茶碗と茶入。日本國が激しさを押し、それらを持って戦いにはいざさか心許ないため、一旦穴に埋めたいの、掘り起こさずとしたのではないのでしょうか。しかし、天目茶碗と茶入は、持ち主に掘り起こされることはありませんでした。戦いで命を盡したのでしょうか。

流石にも、40余年後、発掘調査には2回目の目を見ることがになりました。使用による欠けがみられ、それなりに長く愛用されていたことがわかります。高天神城の戦いでは、多くの戦死者がありました。その多くは名も知らぬ兵士で、この天目茶碗と茶入を使用した持ち主もそんな一兵卒だったのかも知れません。平和を希求して戦いに臨み、再びこの天目茶碗と茶入を使うことを見送っていたのでしょうか。天目茶碗と茶入は、我々に何を告げようとしているのでしょうか。

●横矢：側面、背後、頭上から攻撃すること。

●キルゾーン(Kill Zone)：戦場などにおいて、多数の死者が出る(と予想される)場所。敵を仕留めるための準備がされている場所。

# 高天神城の縄張<sup>\*</sup>(構造)について

難攻不落、堅城を誇った高天神城。その縄張(構造)を探る。

掛川市のほぼ中央にある標高 265m の小笠山から南東に張り出した丘陵末端に位置する、標高約 130m の山城です。城山の周囲は、無数の小谷が入り込んだ複雑な地形を呈しており、とりわけ城の三方は急崖で、東方の丘陵裾には湿地が広がっていました。

縄張(構造)として注目されるのは、城山が●井戸曲輪を境に東峰と西峰に大きく分かれ、それぞれ独立した曲輪群で構成されている点です。この構造は「一城別郭」と呼ばれ、一つの城郭の中に二つの異なる構造をもった城郭構造があることが特徴です。

西峰の曲輪群は、尾根上に●井接曲輪・堂の尾曲輪をはじめとする小曲輪が連続して配置されています。小曲輪群は堀切により分断され、さらに100mにも及ぶ●横堀と土塁により堅守されています。攻め手は、●堀切・横堀・土塁により攻め難いばかりか、否が応でも横堀に誘導され容赦ない頭上攻撃に晒される、迎撃構造が構築されていました。西峰の曲輪群は狭い曲輪を連ね、堅堀・横堀・土塁を駆使した迎撃、観望空間として機能していました。

東峰の曲輪群は、城内で最も規模の大きい●本丸を中心に中小の曲輪を階段状に連ねています。周囲は急崖と深い谷に囲まれた、まさに天然の要害の様相を呈しています。本丸と●的場曲輪の発掘調査では、独立柱建物跡と礎石建物跡に加え、拳大の石を敷き詰めた石敷遺構が確認されました。籠城に備え、兵糧備蓄を目的とした倉庫などが存在したと考えられます。本丸・御前曲輪をはじめとする東峰の曲輪群は、削平と土塁を組み合わせた広い曲輪による居住空間として機能していました。



⑦ 的場曲輪の石敷遺構  
石敷とは拳大の石が敷かれた施設で、倉庫跡と考えられる。



⑧ 独立柱建物跡・礎石建物  
的場曲輪には、石敷遺構だけでなく、独立柱建物や礎石建物もあった。



⑨ 本丸虎口  
本丸を監視していた虎口(出入口)は、左右の土塁をすらすらと食い違っている。



⑩ 三の丸土塁  
三の丸外周には土塁が並び、高天神城の中でも土塁がよく残されている。



⑪ 大河内石置  
掛川方の軍監大河内虎久が崩されたといわれる石置。(コラム1参照)



⑫ 見張り台先端の北堀切  
幅13m、深さ8mを測る巨大な堀切。斜面に沿って警戒塔に伸びている。



⑬ 見張り台先端の南堀切  
幅13m、深さ8mを測る巨大な堀切。転落の危険があるので要注意。



① 井接曲輪構台跡  
城趾の北西先端の高所にあった曲輪で、監視のための構台を備えていた。



② 堂の尾曲輪の横堀と土塁  
全長100mを超える横堀は、山腹にあっては非常に希少な遺構。



③ 袖曲輪・堂の尾曲輪の堀切  
袖曲輪と堂の尾曲輪を分断する堀切で、深さは6m程あり容易には越えられない。



④ 馬場平  
馬に関する施設ではなく、番場(見張り場)が転じて馬場となったもの。



⑤ 犬戻り猿戻り(基五郎の抜け道)  
狭く両側は崖。転落の危険があるので要注意。(コラム3参照)



⑥ 井戸曲輪  
西峰と東峰を分ける曲輪。籠城には欠かさない井戸があった。



※ 縄張：本丸・二の丸・三の丸等の曲輪をどの配置するか、防衛のための堀や土塁をどの場所に築くか等、城の全体像の設計を指す。  
※ 堅堀：等深線にほぼ垂直に掘られ、敵が斜面を縦方向に移動するのを阻む。



特別付録 戦国資料

# 高天神城六砦について

徳川家康は、武田方の高天神城を奪還するために、徹底した高天神城包圍作戦を展開しました。六砦（小笠山砦・中村（山）砦・能ヶ坂砦・火ヶ峰砦・獅子ヶ鼻砦・三井山砦）をはじめとし、20カ所にも及ぶ砦群の築城により、武田軍の監視とともに高天神城への兵糧・物資補給の遮断を徹底しました。

## 能ヶ坂砦

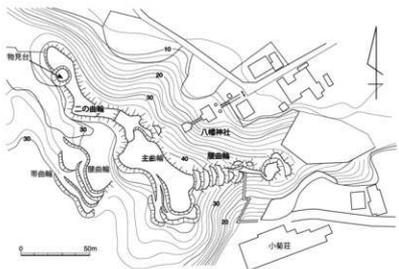
掛川市八貫



高天神城の北約2kmに位置する。小貫・土井地区の境にあたり、元々所帯がわかれたとされる。標高80m程の丘にあり、割りによって残存状態は悪いが、曲輪・腰曲輪が確認できる。

## 獅子ヶ鼻砦

掛川市大石



高天神城の東約3kmに位置する。標高400m程の山岳状に伸びた丘先端部を砦城としている。物見台・曲輪・腰曲輪が比較的良好に保たれている。

## 六砦をはじめとする城砦群による高天神城包圍

城攻めにおいて、砦（障城）と呼ばれる難易かつ強固に築いた比較的小規模な城砦を包圍するように配置し、籠城側を孤立させる戦法が戦国時代に用いられました。とりわけ戦国時代後半には頻繁に用いられ、高天神城包圍においては、大小20にも及ぶ砦が築かれました。さらに高天神城包圍においては、中村（山）砦のように周辺の小河川や湿地を利用した水運、すなわち物資搬入搬出を目的とした砦、獅子ヶ鼻砦、三井山砦や小笠山砦のように砲臺をおさえる砦、その他の監視を主とする砦等に機能分化が進んでいました。機能分化した包圍システムにより、スムーズな物資輸送と兵力の補充と交代が容易となったことで、家康は長期包圍戦を有利に進め高天神城の奪還に成功しました。



## 小笠山砦

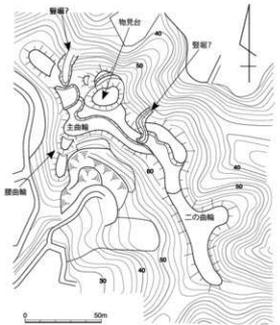
掛川市入山郷



高天神城の北方約4kmに位置し、標高150m程の小笠山山頂付近に築かれています。徳川家康は、永享十年（一五三八）の高天神城の戦いに際し改修している。家康が布陣したとされる砦の要害部は、砦兵士が駐留したであろう曲輪が残る。堀切・土塁のほか大規模な塹壕も残る。

## 火ヶ峰砦(東)

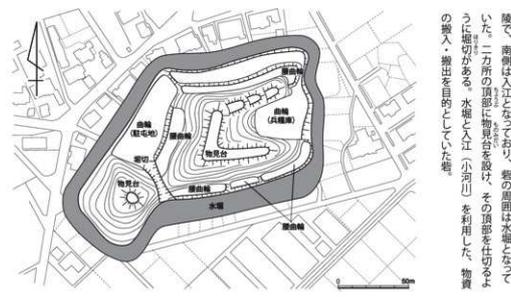
掛川市中方・下方



高天神城の北東約1.5kmに位置する。位置については一説もあるものの、東部は比較的良好に保たれており、頂部の物見台を中心とした主曲輪のほか、腰曲輪・塹壕が残されている。

## 中村(山)砦

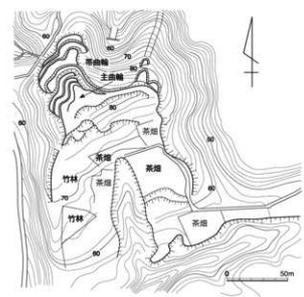
掛川市中



高天神城の南東約3kmに位置する。標高100m程の独立丘陵で、両側は山立とつながり、砦の間隙は途としていた。二カ所の頂部は物見所を設け、その頂部を仕切るように堀切がある。水堀と入江・小河川を利用した、物資の搬入・搬出を目的としていた砦。

## 三井山砦

掛川市大谷



高天神城の南方約3kmに位置する。小笠山から南へ伸びた標高90m程の丘陵状であり、平坦部に加藤州まで渡れる。南部は茶畑により開墾されているが、北部正上部付近には障城状の曲輪が残る。